

## 【論 文】

# マハートマー・ガンディーと日本の関係

林 明

### はじめに

本論文は、ガンディー研究で最も定評のある国際誌 *Gandhi Marg* (Gandhi Peace Foundation, 2016, vol.37, nos.3&4, pp.407-433.) に掲載した“Mahatma Gandhi: The Japanese Connection”と題する英文の学術論文に筆者の見解を多く加え、同英文論文の日本語版論文として筆者が作成したものである。

同英文論文は、著名なガンディー研究者であるオーストラリアの Thomas Weber 先生と筆者が 2012 年から 2015 年にかけて共同で研究したガンディーと日本の関係に関する論文である。Thomas Weber 先生は、School of Social Sciences, La Trobe University の名誉准教授であり、ガンディーに関する著作として、*Gandhi's Peace Army*, *On the Salt March*, *Gandhi as Disciple and Mentor*, *Gandhi Gandhism and the Gandhians*, *Gandhi at First Sight* 等多数がある。オーストラリアの先生との共同研究であるので、海外の視点が入り、興味深い論文になっている。

ちなみに、同英文論文は、インドのガンディー・アーシュラムからの贈り物としてインド外務省を通じて安倍首相夫妻に送られた論文でもある。同英文論文は、インドの日本との外交上贈答品の価値がある論文であるとされ、日印関係の進展のために活用されたのである (“At Sabarmati Ashram, Japan PM Shinzo Abe, Akie Abe Offer Tributes To The Mahatma”, *Ahmedabad Mirror*, 14 September 2017. を参照のこと)。

また、平和の象徴としてインド政府の寄贈によるガンディーの胸像が広島に建てられた (2023 年 5 月にインドのモディ首相、広島市の松井市長らのご出席の下、除幕式が行われた) 背景の歴史に関する評論の中で、同英文論文が取り上げられている (Monika Chansoria, “Mahatma Gandhi: India's Greatest Symbol of Peace and His Japan Connections”, *Japan Forward*, 29 February 2024. を参照のこと)。

本論文の目次は次の通りである。

導入 (Introduction)

ガンディーと日本 (Gandhi and Japan)

日本とガンディー (Japan and Gandhi)

藤井上人、アーナンダとケーシャヴ：アーシュラムの僧侶たちの謎 (Fujii, Anand and Keshav: The Riddle of the Ashram Monks)

他の日本人たちとの接触 (Other Japanese Contacts)

結論 (Conclusion)

本論文の流れは次の通りである。

最初に、導入として、ガンディーのセーワグラーム・アーシュラムの祈りの集会では、今日でも日本の日蓮宗の「南無妙法蓮華経」のお題目を唱えることから始まる事実に触れる（目次の「導入」）。

本文は、ガンディーと日本の関係を 20 世紀初頭に遡り、論を開始する。20 世紀初頭においては、日本人を称賛していたガンディーは、1930 年代以降は、中国における日本の帝国主義のありよう、日本の安い布製品のインド市場における席捲、第二次世界大戦で日本がインドに侵攻する可能性等に問題を感じるようになった。ガンディーが日本人に向けて 1942 年に書いた公開の手紙は、日本の帝国主義を厳しく批判していたが、この手紙は日本の新聞では、日本の政策に都合の良い部分が選択されて紹介された（目次の「ガンディーと日本」）。

次に、1920 年代から日本に現れたガンディーに関する著述の分析へと移る（目次の「日本とガンディー」）。

そして、ここからが中心的な論の展開となるところの、1930 年代のガンディーと日蓮系の宗教団体である日本山妙法寺を創設した藤井日達上人の弟子である丸山行遼上人及び天崎啓昇上人との関係の分析へ入っていく。この関係は、ガンディーが自身の生涯において、生身の日本人と築いた最も重要な関係であった。しかし、太平洋戦争の足音及び開戦とともに、彼らはガンディーの元を離れざるを得なくなった。その後は、「南無妙法蓮華経」のお題目がガンディーのアーシュラムにおける祈りにおいて取り入れられていく過程を分析する（目次の「藤井上人、アーナンダとケーシャヴ：アーシュラムの僧侶たちの謎」）。

次に、ガンディーが築いた他の日本人たちとの関係を分析する（目次の「他の日本人たちとの接触」）。

最後に、戦後の日本及びインドにおける日本山妙法寺の動きにも触れ、論文を終える（目次の「結論」）。

## 導入

インドの中央部に位置するセーワグラームにあるガンディーのアーシュラムを訪れた訪問者が驚くのは、ガンディーの朝夕の祈りの集会（注 1）の正に冒頭で「南無妙法蓮華経」（注 2）のお題目が 3 度唱えられることである。

このことは、事情を知らない人には不可解に思えることである。

ガンディーはヒンドゥー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒、ジャイナ教徒とは親密な関係を築いていたが、ガンディーが仏教徒とどのような関係を持っていたかは資料にはあまり書かれておらず、ガンディーが仏教、特に日本の仏教に関して詳しく研究していたことを示す資料もあまりないからである。

資料から一応わかることは、ガンディーがロンドンに留学していた時に、ブッダの生涯について書かれているエドウィン・アーノルドの『アジアの光』を読んで大いに感銘を受けたこと、ガンディーが1927年後半にセイロン（スリランカ）を2週間、ビルマを3度（1902年初頭に1日、1915年3月に1週間、1929年3月に2週間）訪ねたことである。更に、ダルマ・ヴィールの『ガンディーの伝記』によれば、ガンディーが読んだものとして知られている本として、『ブッダの福音』『仏教に関する講義』『ブッダの道』が挙げられている（注3）。しかし、それにもかかわらず、ガンディーは、実践的な仏教徒と親密な交流を持ったようには見えないし、仏典の深い勉強をしたようにも見えない。ガンディーにとっては、仏教はヒンドゥー教の分派という位置付けにとどまっていた。

ガンディーが書いたものからは、1930年代にガンディーのアーシュラムに住んでいた日本の僧侶が日蓮宗のお題目を習慣的に唱えていたことがわかる。彼が太平洋戦争の勃発によって敵性外国人として拘禁された後、ガンディーは、祈りの集会の最初に、そのお題目を唱えることを始めた（バガヴァッド・ギーターの詩が唱えられると予想されていたが）。多くの宗教家がガンディーを訪れたのであるから、この僧侶の唱えていたお題目がガンディーのアーシュラムの祈りの集会でそのように目立つ位置を占めるに至ったほどの、この僧侶の特別な点は何であったのかを問うことは不合理なことではない。

ガンディーがこの僧侶の滞在について言及した日付を考えると、この僧侶は特定の一人のことだと言っているのか、それともアーシュラムには他の日本人の僧侶たちもいたののだが、後世に彼らがすべて特定の一人にされたということなのかという疑問が湧く。

また、ガンディーとこの僧侶以外の日本人との間にも接触があったとするならば、その接触の目的は何であったのか、そしてもしお互いの間に影響があったとするならば、お互いがどのような影響を及ぼしたのかという疑問も湧く。

## ガンディーと日本

ガンディーが書いたものの中に日本について述べているものはほとんどない（注4）。ガンディー自身が日本や日本人について書いたものの多くは、1904年～05年の日露戦争、1930年代の日本の中国への侵略、第二次世界大戦中の日本によるイギリス領インドへの差し迫った侵略についてであった。1905年初め、ガンディーは、自身の南アフリカの新聞『インディアン・オピニオン（*Indian Opinion*）』の中で、満州の奉天の近くで進行中の日露両軍の戦い及び満州南部の旅順港でのロシア艦隊の壊滅についてコメントした（注5）。3か月後、日本の勝利が明らかになった時、

ガンディーは「日本がそのような勇気を発揮できるとは誰も想像していなかった。…そのような勇気は比類のないものだ。」と述べた。ガンディーは、日本の「壮大な英雄主義」の秘訣は「団結、愛国心、そして死ぬ覚悟」であるとした（注6）。ガンディーは、その時南アフリカでのインド人の権利のための運動を強化している時でもあり、そうした資質のすべてがガンディーによって称賛された。事実、ガンディーにとっては、日本はインド人が見習うべき成功のシンボルとなった。ガンディーは「私たちは日本の例にならい団結し、勤勉になり、私たち自身を教育すべきである。」と述べた（注7）。しかしながら、ガンディーは、日本人の勇敢さを称賛していたのであって、日本が西洋の帝国主義の道を歩み始めたことを意味する勝利そのものを称賛していたのではなかったことには注意する必要がある（注8）。

「インド人は奴隷になるだろうか？」と題された記事で、ガンディーは、同胞の南アフリカのインド人が振る舞うべき見本として再び日本の例に目を向ける。

何らかの私的な用事のために、ヨハネスブルグの弁護士をかつて訪ねた日本からの若い学生のことを私たちは知っている。弁護士はすぐに彼に会うことができなかったので、学生は外で待っていた。その間、イギリス人の役人が弁護士に会いに来た。その役人がノックして弁護士の事務所に正に入ろうとした時、その若い日本人は、役人の服の袖をつかみ役人に向かって元気よく「あなたはまだ入ることはできない。私に優先権がある。」と言った。その役人は、紳士であったのですがすぐに合点がいき、緊急の用事であったので、その若い日本人に最初に入る許可を求めた。その学生は大胆だったのと同じくらい丁寧だった。役人が彼の許可を求めた時、彼は快く役人に先に入ることを許した。この逸話は、奴隷状態とは何であるのかについての正しい考え方を教えてくれるので、すべてのインド人の心に刻まれるべきである。その若い日本人は、彼の自尊心が軽んじられることを許さなかった。裕福な人々であっても貧しい人々であっても、日本の一人一人が自尊心を大切にすることになった時、日本は自由になった。日本はロシアの顔に平手打ちをすることができ、そして今日、日本の旗は世界の中で非常に高くたなびいている。日本の人々は黄色い肌をしているが、日本は、対等な立場で白人の国のイギリスとの友情を享受している。同じように、私たちも自尊心の精神を感じる必要がある（注9）。

ガンディーは、インドに戻ってから、ガンディーの最初の大規模な反英運動の後の1924年に、『聖雄ガンジー』（原著タイトルのママ）と題された自身の伝記のコピーを、更なる追加情報を求めていた日本の作家から受け取った（注10）。その約1年後、ガンディーは、インドと日本の間の長年の宗教的関係に注目していて、そしてガンディーについて読んだことに感銘を受けたがガンディーに直接会ってガンディーのことをもっと知りたいと望んでいた2人の「日本人の友人」の訪問を受けた（注11）。1930年には、ガンディーは、自分の自伝を翻訳する許可を「日本人の友人」に与え（注12）、それから1年半後、ガンディーは自分の新聞記事を翻訳する許可を日本の作家に

与えた（注13）。

この時点で、ガンディーは、外国の、特にイギリス製の布をボイコットすることによって布の生産における自給自足を促進しようとしていた（これにより、日本の布製造業者は、ある意味空白になったインドの布市場を獲得しようとしていた（注14））ので、ガンディーの日本に関する大きな関心事は、インドを日本製の布が席捲していることであった。ガンディーは、1937年後半に、このことを日本人の訪問者、齊藤（YMCA世界委員会のメンバー。齊藤惣一か？*Harijan*にはMr. Saitoとのみ書かれている。齊藤惣一は日本YMCA大陸事業の責任者であったことから、齊藤惣一ではないかと推測される）に率直に説明した。齊藤が日本とインドは多くの共通点を持っているとの意見を述べた時、ガンディーは、日本はアメリカ化され、安い日本の布を投げ売りしてインドを搾取することで今やアメリカとイギリスを打ち負かしているので、東洋はもはや東洋ではないと答えた。この答に驚いた齊藤は、日本は単に安い商品を提供しているだけだと答え、このことが有害であるかどうかを尋ねた。ガンディーは「私はそれらが安いので有害であるとは言わない。しかし、それらは私たちをより貧しくしている。」と答えた。再び齊藤は、安い商品を提供することは有益ではないのかと尋ねた。ガンディーは「いいえ。あなた方は私たちの手足を奪う権利はない（注15）。」と強調して答えた。

1930年代に日本は中国の広い地域を征服した（注16）。1941年12月7日の真珠湾におけるアメリカ海軍基地への奇襲とフィリピン、マラヤ、シンガポール、オランダ領東インド諸島及びビルマの素早い征服の後、日本軍はインドの国境でイギリスと対峙した。当然のことながら、このことが、ガンディーが日本及び日本人について書くことの中心になり始めた。

ガンディーは、日本人を他の国々への侵略者そして搾取者とみなし、インドにイギリス人が存在することが日本の侵略を招いたのだとしながら、起こりうる侵略に対する非暴力的な抵抗を主張し始めた（注17）。ガンディーは、もしイギリス人がインドを去っていたならば、日本の侵略は差し迫っていなかったかもしれないとした（注18）。イギリス人は、ガンディーは親日的であるとのレッテルをすぐに貼った（注19）。ガンディーは、そうでないことを明確にするために、「もちろん、インドの人々は、どんなことがあっても、イギリスの力を取り除くために日本に頼ってはならない。そうすることは病気より悪い治療である（注20）。」と指摘した。後にガンディーは、イギリスがインドを撤退した後、日本に対する連合軍の戦争遂行努力が妨げられないことがないように、そして中国への援助が効率的に継続されうるようにするために、連合軍がインドの地に留まることを認める準備はできているとの声明を出した（注21）。

1942年7月18日、ガンディーは重要な手紙を書いた。その手紙は、7月26日、ガンディーの新聞*Harijan*に「すべての日本人へ」というタイトルで掲載された。何らかの方法でその手紙は日本に渡り（注22）、日本の著名な3誌（日日新聞、読売新聞、都新聞）に手紙の一部が掲載された。ガンディーは、その手紙の中で、日本に対して悪意は持っていないが、「あなたがたが中国に加えている攻撃を極度に嫌っている。」と説明した。そして、「あなたがたは、崇高な高みから帝国



主義的な野心にまで墮してしまった。」と付け加えた。手紙の残りの部分は、以下の通りである。それを読むと、ガンディーの日本の戦争に関する姿勢を明らかにする。

（筆者注：「すべての日本人へ」は、ガンディー著・森本達雄訳『わたしの非暴力2』みすず書房、1997年、33～38頁に全訳があるので、全訳はこの書を参照して頂きたい。本論文では、「すべての日本人へ」の中の以下の文章をこの書から引用させて頂く。引用のためここまでの筆者の文体と異なり「ですます調」での引用となる。句読点の打ち方や言い回しを始め大体はそのまま引用させて頂く。但し、平仮名の一部を適宜漢字にした表現の一部を変えたほか、筆者のここまでの表現を基に、アシュラムはアーシュラム、セヴァグラムはセーワグラムとした。筆者が訳さず、この書から引用する理由は、この書の訳が優れているため、あえて筆者が訳す必要がないと思ったからである。

なお、以下の第二段落に出て来る「日本人の僧侶たち」とは「日本山妙法寺の僧侶たち」のことである。）

あなたがたはその野心の実現に失敗し、ただアジア解体の張本人になり果てるかもしれません。かくして、知らず知らずのうちに、あなたがたは世界連邦と兄弟愛——それらなくしては、人類に希望はありえないのですが——を妨げることになるでしょう。

…私は、1915年に南アフリカからインドに帰ってきましたが、その後私は、日本人の僧侶たちと親しく交わるようになりました。彼らは時々、私たち修道場（アーシュラム）のメンバーとして起居をともしましたのです。そのうちの一人は、セーワグラムの修道場（アーシュラム）の貴重な一員となりました。彼の義務への勤勉ぶり、堂々たる態度、欠かしたことのない日々の勤行（ごんぎょう）、温和な物腰、どんな状況の変化にも動じることのない沈着、そして内面の平和のなによりの証（あかし）である自然な微笑などのために、私たちはみんな彼に敬愛の念を抱いたのです。そして今日、あなたがたが英国に宣戦をしたことにより、彼は私たちのところから連れ去られてしまいました。私たちは親愛な同志ともいえる彼を失ったことをさみしく思っています。彼は記念として、彼が毎日唱えていたお題目と小さな太鼓〔うちわ太鼓〕を遺してくれました。私たちはその太鼓の音で朝夕の祈りを始めています。

こうした楽しい思い出を背景にもっておりますだけに、私にはどうしても理由のないものと思われるあなたがたの中国に対する攻撃のことや、報道が信頼できるなら、あの偉大な古い歴史をもつ国土（くに）をあなたがたが無慈悲にも蹂躪していることを思うたびに、私は深い悲しみをおぼえます。…

その国の古典文芸をあなたがたが摂取されて来た、あの偉大な古い国の民族があなたがたの隣人であるという事実、あなたがたが誇りを感じておられるものとばかり思っていました。お互いの歴史・伝統・文芸を理解し合うことは、あなたがた両国民を結び付けこそすれ、今日のように敵同士にするはずはありません。

もし私が自由な身であったなら、そして貴国を訪れることが許されますなら、私の体力は弱ってはいますが、わが身の健康を、いや生命を賭してあなたがたの国に赴き、あなたがたが中国に対して、世界に対して、ひいてはあなたがた自身に対して行っている罪悪をやめるよう懇願するであります。

けれども、私にはそのような自由はありません。その上私たちは、あなたがたの政策やナチズムにも劣らず私たちが嫌悪している帝国主義に反抗しなくてはならないという独自の立場に置かれています。帝国主義に対する私たちの反抗は、イギリス人に危害を加えるという意味ではありません。私たちは彼らを改心させようとしているのです。それは英国支配に対する非武装の反乱です。いまやこの国の有力な政党〔国民会議派を指す〕は、外国人の支配者たちと、決死の、それでいて友好的な闘いを交えているのです。

しかし、この闘いには、外国からの援助を必要とはしません。聞くところでは、あなたがたのインド攻撃が差し迫っているというこのまたとない機会をとらえて、私たちが連合国を窮地に追いやっているというふうには伝えられているようですが、それは由々しい誤報です。もし私たちがイギリスの苦境に乗じて好機をつかもうと思っているのなら、すでに三年前に大戦が勃発すると同時に、行動を起こしてははずです。

インドから英国勢力の撤退を要求する私たちの運動をどんなことがあっても誤解してもらってはなりません。実際、伝えられる通り、あなたがたがインドの独立を熱望しておられることを信じてよければ、イギリスがインドの独立を承認した場合、あなたがたはインド攻撃の口実を失うはずです。…

あなたがたが、もしインドから快く歓迎されるものと信じておられるなら、幻滅の悲哀を感じることになるだろうという事実について、思い違いのないようおことわりしておきましょう。イギリスの撤退を要求する運動の目的と狙いは、インドを解放することによって、いわゆるイギリス帝国主義であろうと、ドイツのナチズムであろうと、あるいはあなたがた日本型のものであろうと、すべての軍国主義的・帝国主義的野心に抵抗する準備をインドがととのえることにあります。…

…あなたがたの心の正しい琴線に触れることができますようにと、どんなにか念じていることでしょう！ともかく、私は人間性には相反応し合うものがあるとの不滅の信念を抱いています。…あなたがたにこの訴えをするよう私を促したのも、他ならぬその信念です。

ガンディーは、この手紙を「あなたがたの友であり、その幸いを祈るものである。」と結んだ（注23）。日本では、この手紙全体に亘ってみられるガンディーが伝えようとしたものは伝えられず、この手紙は日本の政策にとって有益な部分のみが日本で紹介された。例えば、1942年9月18日の読売新聞の第一面に「ガンジー翁公開状 七月、天崎師に託す」という記事が掲載された。ここでは、便宜的に日本帝国主義に批判的な箇所はすべて削除されていた。読売新聞に掲載された手

紙は、誤報の顕著な例である。その記事では、ガンディーのオリジナルの手紙のうちの厳選された部分だけが紹介されていて、オリジナルにはなかった部分も含まれていた。日本の新聞記事は次の通りである。

（筆者注：戦中の日本語ではあるが、言い回しを始め読売新聞の記事をほぼそのまま載せる。「ガンジー」の表記もそのままにした。但し、記事になかった句点は適宜入れたほか、記事中の漢字・平仮名は現在の漢字・平仮名に改めた。アラビア数字は使わず記事の漢数字のままにした。なお、読売新聞では「天崎」となっているが、正式には「天崎」が家族名である。）

ガンジー翁は去る七月二十六日在印邦人の一知友に託して「日本に対する公開状」なる一文を発表しているが、当時これを故国に伝える由なくいま漸くその機会を得た。翁の知友とはワルダ道場の炊事を勤めていた日蓮宗天崎行昇（筆者注：行昇は出家名、個人名は啓昇である）師で師はワルダ道場にあつてガンジー翁から深い信頼を得、また翁に法華経を通じて日本の高い精神を伝えていた人である。以下日本への公開状の内容である。

一九一五年余は南阿から印度に帰った。その後はワルダ道場を訪れた日本の仏僧達と起居をともし、極めて親密な間柄となったがその仏僧の一人はわが道場に不可欠重要な人員となったが、彼の義務に対する献身的な奥床しき挙措、日日の祈祷への不断の精進、如何なる事態にたち至るも失わぬ悠揚自若、なかんずく安心立命の境地を物語る巧まざる微笑はわれわれ道場員一同を魅惑してしまった。

若しも今日余にして行動の自由を有し貴国が余の来訪を許容するならば愚鈍と雖も余は健康否一身を賭するも貴国に参じ貴国の政治家達と話し合いたいことが山ほどある。

然しながら余はかかる自由を享受せず、そののみか余の反対してやまざる英帝国主義に対して抗争の剣をとらざるを得ない地位に立っている。英国勢力の印度撤退を要求するわれわれの運動を誤解してはならない。

事実においても伝えられる如く貴国が独立を承認すれば貴国は無論印度を攻撃しはしないであろう。

更に伝えられる貴国の対印意思表示は英帝国主義と全く種類を異にしているにおいてをやである。英国撤退要求の企図する目的は要するに印度を桎梏より解放して軍国主義的、帝国主義的な英の欲望に抗争すべく準備せしめるにある（注24）。

（筆者注：日本の新聞記事の特徴は次の点にある。）

ワルダー（正確には、ワルダではなくワルダー）道場（セーワーグラームのアーシュラム）で親しくなった日本の仏僧達の話の後の、日本と中国は文化を通じての古くからの関係があったという部分が、日本の新聞記事では省かれている。



ガンディーは、日本の政治家達と話し合いたいとは書いていないが、日本の新聞記事ではそのように書かれている。

ガンディーは、イギリス帝国主義のみならず日本の政策やナチズムを嫌悪していると書いているが、日本の新聞記事では、ガンディーがイギリス帝国主義に反対していることのみが書かれている。

ガンディーは、イギリスがインドの独立を承認すれば日本はインド攻撃の口実を失うと書いているが、日本の新聞記事では、日本がインドの独立を承認すれば日本はインドを攻撃しないであろうと書かれていて、文章が変わってしまっている。

ガンディーは、インドからのイギリスの撤退を要求する運動は、日本を歓迎していることを意味しないと書いているが、日本の新聞記事ではそのことに触れていない。）

つまり、ガンディーのメッセージは日本の人々には届かなかったということである。

1945年8月上旬に広島と長崎の日本の都市で原爆が投下されて戦争が終結した後、ガンディーは日本がどうなってしまったのかを振り返った。

原爆は連合国軍に空虚な勝利をもたらしたが、その結果、当分の間、日本の魂を破壊することになった。他方、破壊した国の魂に何が起こったのかは、まだわからない。自然の力は不思議な形で働くからである。私たちは、同様の出来事の既知の結果から未知の結果を推論することによって謎を解くことができるだけである。奴隷の所有者は、奴隷が入っている檻の中に自分自身またはその代理人を入れずに奴隷を保持することはできない。私が日本の価値のない野心を認める側に立って日本の誤った行為を擁護したいのだ、というふうには考えないで頂きたい。言いたいことは、破壊された国と破壊した国の違いは程度の違いでしかないということである。日本の欲のほうが無価値な度合いがより大きいものであると思うが、そのことは価値のない度合いがより小さい国に、日本の特定の地域において、無慈悲に人々、女子供を殺す権利を与えたことにはならないのである（注25）。

（筆者注：勝ったほうの連合国も負けたほうの枢軸国も程度の差と言っているところがガンディーらしい。一方的に、勝ったほうが正しい、負けたほうが間違っていると捉えるのではなく、ガンディーは本質から物を見ている。また、ガンディーは、「原爆は魂を破壊するものであり、それゆえ使ってはならないものである」という次元での見方をしており、これは、アメリカ（勝ったほうの国、破壊した国）の論理「原爆は戦争の早期終結のために必要であった」とは別次元の見方である。）

## 日本とガンディー

先述（注10）のように、日本語でのガンディーの最初の伝記（高田雄種による）は、『聖雄ガン

デー』（原著タイトルのママ）というタイトルで出版された。石田雄は、マハートマーという語を日本語にどう訳すかという試みの中で、sageを意味する聖とheroを意味する雄が組み合わせられたと述べている（注26）。「聖雄」ガンディーという言い方は、第二次世界大戦で日本が敗北するまで、ガンディーの印象を特徴づけた呼称であった。おそらくガンディーに対する日本の認識がそうした言い方につながったのであろうが、石田は、そうした言い方の選択が、日本のガンディー認識につながったという見解を取っている。「聖雄」という言い方は、心の平穏を達成した高潔な人を意味する伝統的なファキール（托鉢僧）のイメージを生み出した。このことは、ガンディーの教えは「無抵抗」であるとしばしば誤解されてしまうことを意味した（注27）。「聖雄」という言い方は、戦前の日本の検閲政策によって認可されたようである。石田は、「内政上の不安を回避しなかった当局は、「無抵抗」という言葉はガンディーの反国家的イメージをなくする効果があるため、この言葉を好んだ。」としている（注28）。言い換えれば、ガンディーは、特に政治的な目的のために、活動家としてより精神性を持った人として描かれる傾向があったということである。

高田の本が出版されたのと同じ年に、茂森唯士は、ガンディーの自然への回帰願望と近代文明に反対する姿勢を書いた『ガンデイ及びガンデイイズム』（原著タイトルのママ）を出版した（注29）。饒平名智太郎と鹿子木貞信は、『ガンヂと真理の把持』（原著タイトルのママ）を出版した。この本は、エゴイズムと近代資本主義、白人優越主義とイギリスの帝国主義に対するガンディーの反対の姿勢を称賛する一方、ガンディーを普遍主義者というよりも民族主義者として描いた（注30）。帆足理一郎は、『トルストイとガンディーの宗教思想』（原著タイトルのママ）を出版した。饒平名と鹿子木の本以外の本は、ガンディーが積極的に政治に関わった面を取り上げていないようであり、むしろ、上述したように、ガンディーは「無抵抗」を掲げた人であると繰り返し述べていた。石田は次のように記している。

インドにおけるガンディーの運動の性質や規模に関するより正確な情報が日本に浸透し始めたという事実にもかかわらず、この（「無抵抗」という）使用法は1940年代初頭まで続いた。この新しい情報により、受動的抵抗とサティヤグラハの違いがわかって来たが、それでも古いイメージは残った。なぜガンディーに関する日本の書き手たちの心の中に、「無抵抗」のイメージが残ったのかを説明することは非常に難しい。もっともらしい可能性の一つは、そのような書き手たちが日本の伝統的な概念的枠組みを参照して、ガンディーの思想を説明しようとしたということである。しかしながら、その枠組みの中には、非暴力による直接行動という概念はなかった（注31）。

この「無抵抗」というイメージによる解釈は、おそらく戦前の日本の検閲政策によって、助長されたものと思われる。石田氏は、ある著者は「イギリス帝国主義」に対するガンディーの市民的不服従について言及することは許可されていたものの、ソローによる市民的不服従に関する抜粋の簡

所は削除しなければならなかったと指摘している（注 32）。しかし、それにもかかわらず、藤井日達上人やおそらくインドでガンディーを訪ねたであろう日本の日蓮宗の他の僧侶たちは、非暴力による直接行動を提唱し続けた。

他方、戦時中になると、（日本にとってのガンディーの運動の）重点は別なところに置かれるようになった。日本の国粋主義者たちは、日本は西洋の帝国主義に対して戦っていると見ていた。この「大東亜のための戦争」では、日本の指導の下で「すべてのアジアの国々が戦争に協力するであろう」ことが期待された（注 33）。だが、ガンディーは、日本の対中国の戦争は、西洋の帝国主義列強が行った侵略の形態と何ら変わらないと特徴づけたので、（ガンディーの反英闘争は大東亜戦争に結び付けられるであろうとの）期待は、日本の希望的観測の最たるものであることが証明された。日本の（大東亜戦争はアジアの解放のためのものであるとの）プロパガンダにもかかわらず、ガンディーが書いた「すべての日本人へ」という手紙の中に書かれていたガンディーのメッセージは、ガンディーの日本に対する考え方をこれ以上ないほど明確に示していた。

#### 藤井上人、アーナンダとケーシャヴ：アーシュラムの僧侶たちの謎

ガンディーが政治指導者として、日本のことや日本が世界で果たしていた役割、特にインドにどのような影響を与えていたのかを考えていなければならなかったことは理解できる。だが、実際には、ガンディーが日本に関して書いたことは、他の多くの国々に関して書いたこと以上に特別なことは書いていない。ガンディーが祈りの集会の冒頭に日本のお題目を取り入れるまでにさせた日本からガンディーへの真の影響は、日本の僧侶から来たものであった。

ガンディーのアフマダーバードのサーバルマティー・アーシュラムを訪れた日本人の僧侶の最初の記録は、アーシュラムを訪ねて来る外部からの人間を迎える役を公式に担うことになったアーシュラムを訪問中の中国人で、その頃アーシュラムの住人となっていた人物（シャーンティ・ツェン）によって記述されている。シャーンティ・ツェンは、仏教の話をたくさんすると同時に日本の天皇の写真を服の中に隠し持っていてその写真を地元の人々に配っていた若い日本人僧侶を 1925 年終わりか 1926 年初頭に迎えたことを記録している。ツェンは、「その僧侶は、仏教の教えを説くことができた一方で、彼の政治的な見解には、宗教の域をはるかに超えたものがあった。」と記録し、「彼が真正な僧侶であるとは信じがたかった。」と結論付けた（注 34）。

しかし、もちろん真正な僧侶がいた。1933 年 5 月、外国人訪問者を含む残りのアーシュラムの住人がワルダーに移される少し前に、日本人の僧侶がサーバルマティーに到着した。外国人訪問者の一人であったダンカン・グリーンリーズは、「日本人の僧侶が夜に、太鼓を打ち鳴らし奇妙なお題目を唱えながらやって来て、村人たちの間で精力的に働いた。」と述べた（注 35）。アーシュラムの住人の中には、この僧侶がお題目を唱え太鼓を打ち鳴らす行為はやり過ぎだと考えた者もいたが、彼はすべての宗教を受け入れることをモットーにしているアーシュラムの客人であったので、「誰もその行為について何かすることはできなかった（注 36）。」

1933年9月中旬、ガンディーはプーナで日本の僧侶、興津忠男上人と話をした。興津上人は、インドに奉仕したいと思い、マハートマの元に指示を求めるためにやって来た。ガンディーは興津上人に手紡ぎの仕事を課し、手紡ぎを習得した後には彼には他の仕事を与えられるだろうと言った（注37）。2週間後の10月4日、興津上人と彼の師匠（藤井日達上人）は、ワルダー（筆者注：この時ガンディーが彼のアーシュラムをサーバルマティーから移転する準備を進めていた場所）のガンディーを訪ねた。藤井上人（彼のことをガンディーはグルジー＜グルは「師匠」、ジーは「～さん」の意味＞と呼んだ）とヒンディー語を話す彼の通訳の興津上人は、インドで仏教が復活することを願っているとガンディーに伝えた。するとガンディーは彼らに次のように指摘した。

仏教がどのようなものを意味するにせよ、悟りを開いた者ゴータマの教えの本質は、ヒンドゥー教の中に取り込まれている。そして私の意見では、その偉大な改革者の教えの純粋な部分は、他と比較してインドで最もよく保持されているということである。仏教を採り入れた国々においては、仏教は劣化していったように私には思える。例えば、ブッダの教えは、人間の兄弟愛だけを説いたように捉えられているが、あらゆる生命の兄弟愛を本質的には説いていたことが挙げられる。私の意見では、ブッダは新しい宗教を創始したのではなかったということである。ブッダは、ヒンドゥー教徒の中のヒンドゥー教徒として、ヒンドゥー教に新しい方向性を示したのである。従って、私は、あなたがたにサンスクリット語とパーリー語を勉強して、ブッダの教えについての知識を深めていくことをお勧めする。サンスクリット語の勉強は、ブッダの教えがどのような時代状況に適合して生まれたものなのかを理解するために必要であり、パーリー語の勉強は、原典がその言語で書かれているがゆえに必要なことは明らかである。そして、あなたがたはインドの人々と運命を共にすることを決意されたのであるから、ヒンディー語またはヒンドゥスターニー語を学ぶことに関心を向けるようお勧めする。最後に、たとえどのような宗教の復活が必要とされるにせよ、それは、雄弁や学習によってではなく、自分の人生において純潔さを日々高め、宇宙を活気づけ、照らし、そして維持している生ける真理であるところの大いなる知性に祈りを捧げることによってのみなされるということをお伝えしたい（注38）。

興津上人と彼の師匠（藤井日達上人）がこの忠告をどのように受け取ったのかはわからない。15分間行われたとする藤井上人の会見の回想によれば、会話の話題は、インドにおける日本の商業的搾取についてであった。藤井上人は、「商業上のことについては何も知らない。」としか答えることができなかった（注39）。ロバート・キサラは、藤井上人は実際には、ガンディーと1回目は15分間の、2回目は5分間の合わせて2回の会見をしたとしている。最初の会見は、商業上の問題に関するものであったが、2回目の会見では、藤井上人は、インド訪問の目的を説明した手紙（中には日本軍国主義の擁護も含まれている）をガンディーに手渡したということのようである（注

40)。藤井上人は、自叙伝の中で、会見の後、ガンディーは太鼓を叩き、日蓮宗のお題目を唱えたと記している。そして、藤井上人が引き続きアーシュラムで過ごしていた間に、「アーシュラムに集っていた人々は、祈りの集会の冒頭で南無妙法蓮華經を唱える習慣を身に付けていった。」としている（注 41）。

1917 年、藤井日達（1885-1985）上人は、日本の日蓮宗（注 42）の日本山妙法寺という派を設立した。日蓮宗は日本を世界の宗教の中心地と見なしているため、日蓮宗は日本中心主義であり更には排外主義的であると捉えられている向きもある。日本山妙法寺は、世界平和を提唱し、その信奉者たちは、うちわ太鼓（＝天国の太鼓）をドンドン、ドンドン、ドンと叩く音に合わせて、マントラの「南無妙法蓮華經（お題目）」を唱える（撃鼓唱題くぎゃっくしょうだい）。お題目が完全なる帰依の精神で唱えられれば、仏の世界がたちどころに実現できると信じられている。1903 年から僧侶となっていた藤井上人は、1918 年に説法を開始し、東アジアを旅して回った。藤井上人は、1931 年から 1933 年にかけて、日蓮の予言を実現し、インドで仏教の復活をもたらし、彼の日本山妙法寺の宗教をアジア中に広めるために、インドへの巡礼の旅に赴いた。彼は、広島と長崎に原爆が投下され、第二次世界大戦に日本が敗北した後、急進的な平和主義者になった（注 43）。

藤井上人との会見のしばらく後、ガンディーは、自分と子供（筆者注：Babo という名の子供）と一緒にサードゥー（筆者注：修行者の意味。ここでは藤井上人を指す）の太鼓を叩いたことを記している。藤井上人その人については、ガンディーは「サードゥーは宝石である。彼は非常に率直で謙虚で、陽気で礼儀正しい。彼はヒンディー語を学んでいる。彼はまた、チャルカー（手紡ぎ車）とタクリー（手紡錘）で糸を紡いでいる。彼は、すべての規則を几帳面に守っている。」と言っている（注 44）。更に 1 か月後、ガンディーは、とてもよく似た言葉を使って、2 か月以上（10 月 4 日から 12 月 8 日まで）アーシュラムに滞在した藤井上人について記している（注 45）。

ガンディーの日本人との交流の中で最も重要なものは、ガンディーのセーワグラーム・アーシュラムに（藤井上人よりも）もっと長期に亘って滞在した僧侶たちとの交流である。ガンディーは僧侶たちについて称賛の念を持って大いに語っているものの、残念なことに、彼らの名前が記されていないことが多いため、ガンディーが一人の僧侶について語っているのか、様々な時期に様々な期間滞在した異なる僧侶たちについて語っているのかを判断するのは困難である。例えば、先に引用した 1942 年 7 月の「すべての日本人へ」というタイトルで公開された手紙の中で、ガンディーはそのような僧侶の一人について語っている。この僧侶は、丸山行遼上人（藤井上人がインドで平和の使命を遂行することを任せ、ガンディーが丸山上人の振舞いから愛情を込めてアーナンド・ヒンディー語で至福または喜びの意味 - と名付けた僧侶）であると一般的には考えられている。（筆者注：しかし、「今日、あなたがたが英国に宣戦をしたことにより、彼は私たちのところから連れ去られてしまいました」という文に合う僧侶は天崎啓昇上人である。なぜならば）1937 年 12 月 8 日からセーワグラームに住み始めた丸山上人は、1940 年 10 月（筆者注：1940 年 10 月の時点では日本からイギリスへの宣戦布告は行われていなかった。宣戦布告が行われたのは真珠湾攻



撃翌日の1941年12月8日のことである）にイギリスのインド政府によって逮捕された（からである）（注46）。

丸山上人は、インド中を動き回って、彼の政治的見解を表明し、ジャワーハルラール・ネルーやスバース・チャンドラ・ボースといったインドの政治指導者と議論を交わしていた（注47）。彼はスパイとして逮捕され、パトナの刑務所に43日間拘留された後、日本に送還された（注48）。

アーシュラムの住人であったブリジュ・クリシュナ・チャンディワラーは、ケーシャヴ（筆者注：天崎啓昇上人のこと）と呼ばれるもう一人の僧侶が1935年にワルダーのマガンワディ・アーシュラム（筆者注：ガンディーは1930年にアフマダーバードのサーバルマティーからワルダーのマガンワディにアーシュラムを移した。同じワルダーのセーワグラームにアーシュラムを移すのは1936年である）に加わったことを記している。祈りの集会が始まる前、この僧侶はガンディーにお辞儀をし、太鼓を叩き、「南無妙法蓮華経」のお題目を3度唱えた。祈りの集会が終わると「彼は、太鼓に合わせて南無妙法蓮華経のお題目を唱えながら村を歩き回った。」（注49）（ちなみに、チャンディワラーは、日本がドイツと組んで戦争を行うことになった時、ケーシャヴがイギリス政府によって拘禁されたことも記している。その時ケーシャヴは、ガンディーのもとに彼の太鼓を思い出の品として、置いていった。ガンディーは、ケーシャヴが唱えたお題目は、アーシュラムの祈りの集会で唱えられる祈りの文言として不可欠なものとしてあり続けるであろうことを約束し、「それ以来、アーシュラムの朝夕の祈りの集会は、お題目を唱えることから始まることになった。」（注50））なお、同年（1935年）半ば、アーシュラムの住人であったバルヴァントシンハは、当時日本語と英語しか話せなかった「ケーシャヴバーイー（バーイーは兄弟の意味）」にヒンディー語を教える仕事を任されたことを記している（注51）。

この日本人の僧侶、天崎啓昇上人は、ワルダーのマガンワディ・アーシュラムで3か月近くを過ごした（注52）。天崎上人は、日本の服を買っていた。ガンディーのswadeshi（地産地消。国産品愛用）に関する考え方に照らせば、ガンディーが天崎上人を諭したことは驚くことではない。

それは、確かにあなたにとってのswadeshi服ではあるけれど、あなたがインドで着るべき服ではない。「郷に入っては郷に従え」ということわざは無意味な言い習わしではない。私たちは、その国の塩を食べる国の風俗や習慣を守らなければならない。私はアフリカにいた時、アフリカ人の手で作られたものをできるだけ多く使おうとした。だから、あなたに特別異議がない限り、カーディー（手紡ぎ・手織り綿布）を使うようにお願いする。カーディーは、間違いなくより高価ではあるものの、あなたが必要と思っている服の量より少ない分量で事足りるようになるのではないかと思う（注53）。

（次のように述べるとあるいは批判を受けるかもしれないが）この天崎上人は、（1935年の）2年前（1933年）にアーシュラムに滞在した僧侶（藤井上人）と同じくらい深い印象をガンディー

とアーシュラムの住民たちに与えたと言える。天崎上人は、カルカッタにおける日本山妙法寺の僧侶の交代要員として、アーシュラムを去らなければならなくなった時、ガンディーは天崎上人を温かく見送った。

私は、私たちのところに滞在していた人が出発する際に何かを言うことはめったにないが、第一に彼が日本からの訪問者であるゆえに、第二にそして大きな理由として、彼の私たちのところでの暮らしぶりによって彼が私たち全員に示してくれた高貴なる模範のゆえに、今日はそうする。彼は4、5か月間（筆者注：実際は上述のように3か月近く）私たちと一緒にいたが、彼のように献身的にそして滅私の精神で仕事をした者はいなかった。彼はとても静かに仕事をしたので、私たちは彼の存在にほとんど気付かなかった。彼が祈りに没頭する様子は誰をも魅了するものであった。一つのお題目を一日4時間、おざなりにではなく、熱意、献身さ、集中力を持って何度も繰り返し唱えることは、普通できることではない。インドの言語はおろか英語でさえあまり知らない状態（上述のバルヴァントシンハの記述を参照）でやって来た彼は、最初私たちの只中にいて全くのよそ者である感覚を持ったであろう。しかし彼はすぐに馴染んでいった。彼はヒンディー語の勉強をし始め、すぐに私たちといくらか話すことができるくらいにまで学んだ。しかし、私が最も称賛するのは、彼が私たちと一緒にいたすべての日々において彼が発していた喜びの輝きである。誰も知らない、そして、言語、マナー、習慣などあらゆるものが未知な土地におかれた自分を想像し、この友人が私たちの只中にいて暮らしたように暮らすことができるかどうか自問してみてほしい。私はそうすることができなかったと思うし、あなた方の誰もできなかったと思う。彼は内なる自己から喜びを引き出していたと言わざるを得ない。なぜなら、彼がここにいた時の環境は、彼にとって喜びの源になるようなものではなかったことを私は確信しているからである。私たちの誰も彼が苛立っているのを見たことはない。彼がいたあらゆる場所で彼は称賛に値する喜びの輝きを放っていた。だから私たちは皆、彼がいなくなることを淋しく思う。私たちは彼に心からの別れを告げ、彼ができるだけ早く私たちのところに戻って来ることを願っている（注54）。

ガンディーの弟子の中には、「1941年12月、セーワーグラームでガンディーと共に暮らしていたケーシャヴバーイーという名前の日本人僧侶が、攻撃的で怒った若い男に殴られたが、他者に奉仕する驚くべき素質、快活さ、自己を律する能力を持っていたケーシャヴは、やり返そうと思えばいくらでもそうできたのにもかかわらず、そうせず、殴られるに任せ、真の英雄的精神、気高さを示した。」と記録している者もいる（注55）。

天崎啓昇上人（ケーシャヴバーイー）は、（ガンディーと共に暮らしていた1935年から4年後の）1939年9月にワルダーに戻り、セーワーグラーム・アーシュラムに更に2年3か月暮らした（注56）。天崎上人（ケーシャヴ）は、アーシュラムの真の住人になった。彼は、政治的意見を表

明することはなかったので、イギリスに危険と見なされることはなかった。しかし、彼は、太平洋戦争の勃発の後、拘禁され（注 57）、その後すぐにデリーの強制収容所へ移された（注 58）。1942 年 2 月、ガンディーは、長期間に亘る日本人の客人であるケーシャヴに関しての称賛の言葉を述べた。

中国人、ビルマ人、ユダヤ人、セイロン人、ムスリム、パールシー、ヨーロッパ人、アメリカ人などあらゆる人たちが時折アーシュラムに暮らした。その流れの中で、2 人の日本人のサードゥが 1935 年にマガンワディにいた私のところへやって来た。その内の一人は、日本との間で戦争が勃発したつい先日まで私と一緒にいた。彼は、セーワグラームにある私たちの家の理想的な同居人であった。彼は、あらゆる活動に熱心に取り組んだ。私は、彼が誰かとけんかしているのを一度も聞いたことがなかった。彼は、寡黙な仕事人であった。彼は、できる限りヒンディー語を学んだ。彼は、自分の誓いを厳しく守る人であった。毎朝、毎夕、うちわ太鼓を叩きながら歩き回る彼の姿が見られ、お題目を唱える彼の声が聞こえた。夕方の祈りはいつも彼のお題目（デーヴァナーガリー文字で祈りの書の中に記されている）と共に始まった。お題目の意味は、「私は、真の宗教をもたらした仏陀に首を垂れる。」である。私は、警察が彼をアーシュラムから連れ去るため予告なく来た日、彼が素早く、規律正しく、超然としてその事態を受け入れたことを決して忘れないであろう。彼は、自分のお気に入りのお題目を唱えた後、私と告別し、自分のうちわ太鼓を私の元に置いて行った。「あなたは私の元を去って行くが、あなたのお題目は、アーシュラムの祈りの中の不可欠な要素となって残るであろう。」という言葉が自然と私の口から出て来た。その時以来、彼はいないにもかかわらず、私たちの毎朝、毎夕の祈りは彼のお題目と共に始まることになった。私にとっては、そのことは、サードゥのケーシャヴの純粹さとひたむきな献身さを常に思い起こさせるものである。実際そのことの効能は、聖なる記憶の中にある（注 59）。

藤井グルジーの主張、即ち、彼がアーシュラムの祈りで最初に唱えられる日本のお題目をもたらしただのであるという主張はさておき、1942 年初頭に拘禁されるに至ったケーシャヴバーイーの存在が、そのことをもたらしただというのがもっともあり得ることである。

ガンディーの秘書のマハーデーヴ・デサーイーは、セーワグラーム・アーシュラムの同居人について記していたが、その中で彼は、日本人の同居人に対して、興味深い、少々異なった見方を示していた。ガンディーのように、デサーイーは、アーシュラムのあらゆる困難な雑用をこなし、毎朝毎夕にオーム南無妙法蓮華經と唱えながらうちわ太鼓を叩きながら陽気に歩き回り、馬車馬のように働き、隠者のように暮らすサードゥの美德を称賛していた（注 60）。他方、この僧侶に関しての国粹主義的な、そしておそらく特に日蓮宗の排外主義的な傾向や（次に「」で記すように）それ以上のことをほのめかしている。「彼はもちろん親日本的であり、日本は、中国に奉仕し、中国

を文明化するために海外にいと信じている。しかし、彼は日本政府のスパイであるとする者もいるが、私はそうした言説は微塵も信じていない。もし彼がスパイであるならば、スパイとは最も気立ての優しい人間であるに違いないし、私はスパイの一人になりたいものである。彼は、(ガンディーを除く) 誰よりもアヒンサ (ahimsa 非暴力) の福音に従って生活している (注 61)。」(筆者注：ここまで天崎上人のことで論が展開され、以下も天崎上人のことで論が展開するが、この段落のデサーイーの記述の中の日本人の同居人 (僧侶) とは、天崎上人ではなく丸山上人のことである。)

1945 年末頃の祈りの集会でのガンディーのスピーチに関する新聞記事の中のアーシュラムでの祈りの文言の順番に関する記述のところで、ガンディーは、1936 年にワルダーのマガンワディ・アーシュラムを訪れた多数の日本人僧侶について言及したように記している (注 62)。そして、リーダー的な僧侶 (筆者注：藤井日達上人であろう) が彼の弟子の一人ないしは二人 (筆者注：丸山上人、天崎上人であろう) をアーシュラムに送ることを申し出たことを記している。ガンディーはその申し出に同意した。

最初に一人が来て、後にもう一人が来た。二人の内の一人 (筆者注：以下の「日本との戦争が勃発するまで留まっていた」という記述から天崎上人のことであることがわかる) は、日本との戦争が勃発するまで留まっていたため、収監されることになった。この仏教僧侶は、与えられたあらゆる仕事を几帳面にそして整然と行っていた。仕事の合間には、彼は、いつも小さな太鼓を叩いて、日本語で宗教歌を歌い、アーシュラムを巡回しながら自由に過ごしていた。この仏教の宗教歌は、大いなるものを称える歌であった。ガンディーは、この歌を祈りの中に取り入れたと言った。これは、祈りの最初の部分を構成することになった (注 63)。

ガンディーは、1 年後のある祈りの集会のスピーチで、(当の僧侶の名前は記さずに) 同様なことを言っていた。(筆者注：以下の「日本との戦争が勃発したことにより彼がイギリス政府により拘禁された」という記述から上記の「当の僧侶」とは天崎上人のことであることがわかる。)

ガンディージー (ジーは「～さん」の意味) は、アーシュラムの祈りで唱えられる最初のマントラである南無妙法蓮華經の意味を説明した。その意味するところは、「悟りを開いた者へ敬意を表すること」である。2 年か 3 年の間セーワグラムに滞在することになった日本人の仏教僧侶 (注 64) の存在がそのマントラを祈りに加えさせた。彼は、インドに起源を持つところの宗教の秘密を明らかにする目的を持って、インドにやって来た。その僧侶は、優しい性格をしており、控えめで親しみやすく物静かな人柄でセーワグラム・アーシュラムの皆に慕われていた。毎朝、彼は、太鼓を叩き先に述べたマントラを唱えながら、(その声を聴いた誰をも感動させる) 深遠な音楽のような声でたっぷり一時間をかけてアーシュラムの敷地を歩

いて回った。彼は、祈りの集会でそのマントラを唱えるのが日課であった。そのマントラは、日本との戦争が勃発したことにより彼がイギリス政府により拘禁された後も唱え続けられた（注 65）。

印パ分離独立に至る過程において、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の間では暴力が広範囲に発生した。ガンディーは、平和を回復するためにできることすべてを必死に行っていた。しかし、コミューナルな感情は高まり、ヒンドゥー教徒の中には、ガンディーの祈りの集会でイスラム教徒の祈りの言葉を含めることに不満を漏らす者が出た。ガンディーは、どの宗教も公平に扱うべきであるという考えを示すことを決意し、聴衆に、そのような考えに則った行動を促した。コーランからの詩句を唱えることに異議を申し立てる者が出たのを受けたある集会で、ガンディーは、祈りをやめ、聴衆に直接話しかけた（筆者注：直接話しかけた言葉なので、ここだけ「ですます」調にした）。

兄弟姉妹たちよ、毎日そうであるように、静かにして下さい。あなたがたは、ここにお祈りのために来たのでしょうから、ここに着いた以上静かに座して下さい。話すことはいつでもできます。祈りの集会が散会した後に、あなたがたは話すことができます。しかし、その時までは静かにして下さい。なぜならば、沈黙は祈りの本質であるからです。

祈りの中の（筆者注：コーランからの詩句以外の）他の部分に関しては、唱えることに対しての皆からの反対はないのに、コーランの詩句から唱える部分に関してだけ皆からの反対があります。それゆえ、明日からはお祈りを Auz-o-Billahi（筆者注：イスラム教の祈りの言葉）を唱えることから始めます。今までは、お祈りは、仏教徒の唱える日本語の言葉から始めていました。ある日本人僧侶（注 66）が、セーワグラームで私と一緒に住んでいました。彼は、アーシュラムの周囲を毎朝一時間うちわ太鼓を鳴り響かせて回りながら、この言葉を力強く旋律的な声でいつも唱えていました。彼は、その言葉を祈りの集会の中で唱えたいという希望を述べ、私はそのことに同意しました。そしてそれ以来お祈りはいつもその言葉を唱えることから始まりました。しかし、明日からはお祈りを Auz-o-Billahi で始めます。そして誰からの反対がない限り、お祈りはそのようになされていくでしょう。もしくは、別の方法としては、あなたがたは、沈黙して座り、心の中で祈り、静かに帰るという方法があります（注 67）。

ガンディーは暗殺される 4 か月半前に、もう一度、ヒンドゥー教徒以外のコミュニティーに属する祈りの言葉（筆者注：日本人僧侶の唱えていた言葉）を祈りの中に含めることについて説明した。日本人僧侶が唱えていたお題目に関して、ガンディーは次のように言った。

なぜお祈りが仏教徒の日本語の祈りで始まるのかについて問われるべきである。祈りの言葉の



選択の背後には、神聖な性格にふさわしい歴史がある。その仏教徒の祈りは、物静かで威厳に満ちた行為によってアーシュラムの住民たちに親近感を抱かせた善き日本人僧侶（注 68）がセーワグラーム・アーシュラムに滞在していた時に、セーワグラーム中に毎朝鳴り響いていた祈りであった（注 69）。

これらすべての描写は大変類似している。要するに、日本人僧侶の出入りに関しての年譜はやや混乱しているということである。ガンディーのアーシュラムにやって来た日本人僧侶は物腰がとてもよく似ていたということが言えるのであろうが、異なる人物が同一の人物であるかのように混同したり、ある著名な人物のアーシュラムにおける話を他の人の話にしてしまった可能性もある。（筆者注：Haishao<注 64、注 66、注 68>、Keshav、Tenzakiが同一人物であると考えれば、この3つの表記が表している人物が天崎上人であるという点に関しては混同はない。）

### その他の日本人との接触

ガンディーを訪ねたのは日本人僧侶だけではない。彼ら以外の重要な日本人も定期的に訪れて来た。1935 年 12 月下旬、医者が止めたのにもかかわらず、病気を患っているガンディーは、日本の詩人野口米次郎（注 70）をワルダー・アーシュラムに招待した。彼らの議論の中で、ガンディーは、日本について何か知っているかと尋ねられた時、英語の雑誌の中で日本の生活を描いたエドウィン・アーノルドの週刊の手紙で 45 年前に読んだものを除いて、日本についてほとんど知らないことを認めた（注 71）。ガンディーは、「貿易上の競争相手」という観点から見た日本の「暗い側面」について批判したが、すぐに彼は、（以下の 1939 年の）前年にアーシュラムに滞在した日本人キリスト教宣教師であるジョセフ・香川（1939 年に来た香川豊彦と混同しないようにしてほしい）を通して見た日本の明るい面も知っているということを付け加えて述べた。野口が日本へのメッセージを求めた時、ガンディーは、彼のメッセージは日本人がインドの詩人ラビンドラナート・タゴールから既に受け取ったメッセージの中に含まれていると答えただけであった（注 72）。恐らくガンディーは、タゴールが 1916 年に初めて日本を訪れた際の及びそれ以来繰り返した日本に対する批判に言及していたものと思われる。タゴールは、日本の近代化へのアプローチを西洋のナショナリズムの模倣として批判した。1938 年、野口はタゴールに手紙を書き、日本のナショナリズムと軍国主義に対する彼の否定的な見方を再考するよう求めた。1938 年 9 月 12 日、タゴールは日本に「弱い者いじめをするやつ」というレッテル貼りをして、返答した（注 73）。

3 年後の 1938 年 12 月、ガンディーは、（反イギリスという大義の下での結び付きであることをほのめかしながら）インドと日本を結び付けるためのアドバイスを求めている日本の国会議員の高岡大輔と長い話し合いをした。ガンディーは素っ気なく次のように答えた。

日本がインドに対し貪欲な目を向けるのをやめれば可能かもしれない。あなた方は、インドに

軍隊を連れて来なくても、しばしば薄くて軽いあなた方の布地をインドで溢れさせるために、比類のない技、真実を隠す能力、インド人の弱点に関する知識を使うのである。あなた方は、インドの支配者の搾取方法をまね、更には一枚上をいっている。日本の立場からすると、インドから得られる何百万ルピーを失うわけにはいかないであろう。あなた方が自発的にそれらを手に入れることができないならば、武力によって手に入れかねないであろう。しかし、それは日本とインドを結び付ける方法ではない。日本とインドを結び付けることができるのは、相互の友情に基づく道徳的な絆である。だが今日その友情のための基盤はない。私は、あなた方のすべての良いところを吸収したいのだが、残念ながら日本の良いものを私たちにくれる人は誰もここに来ない。あなた方は、私たちにあなた方の商品を投げ売りすることだけを考えている。どんなに上質で美しいものだとしても、どうして日本の布をたとえ1ヤードでも買うことができようか。日本の布は私たちにとって毒である。なぜならば、それはインドの貧しい人々にとって飢餓を意味するからである。あなた方は、外交、技術、安価な製品、武力を使った戦闘、搾取といった点において、西洋をはるかに上回っている。あなた方が搾取を何も悪いことではないと思っている限り、どうしてあなた方と私たちの間に友情があり得ようか？

著名な国会議員がこのような言い方をされたことについて何を思ったかは不明である。おそらく彼は、その（上述の）話題をやめるためもあって、ガンディーに「アジア人のためのアジア」の立場に立つ彼の新党のためのメッセージを求めた。だが彼は、（そのメッセージを求めたことで）もう一つの間違いを犯してしまうことになった（それは、ガンディーの返答が好意的なものでなかったことからわかる）。「私は、アジア人のためのアジアという教義が反ヨーロッパということを意図して出されている教義ならば、その教義に賛成しない。アジアを井の中の蛙のままにしておくのに満足でもしていない限り、どうしてアジア人のためのアジアという教義に賛成できようか。だがアジアは井の中の蛙のままにしているわけにはいかない。アジアは全世界へのメッセージを持っている（注74）。」インド人同朋の中には、イギリス帝国主義に対する闘いを促進する手段として日本人と喜んで組もうとする者たちもいたのである（筆者注：これはチャンドラ・ボース等のことを言っている）が、ガンディーは日本帝国主義を支持するつもりはなかった。

1か月後の1939年1月15日、日本の社会改革者であり、キリスト教伝道者であり、平和主義者であり、作家である賀川豊彦博士がバールドーリーのスワラージ・アーシュラムにガンディーを訪ねて来た（注75）。議論は協同組合の利点から始まったが、すぐに日本の戦争に話題が移った。賀川は自分が異端者的な考えを持っていることを認めた上でなお、自分の意見を表明することに気が進まないようであった。代わりに賀川は、ガンディーに自分が賀川の立場であったならば何をするかと尋ねた。ここでもガンディーは非常に率直に見解を述べた。

私ならば異端者的な考えを表明して銃殺されることをよしとするであろう。私は、協同組合を

始めとするあなたのすべての仕事と、あなたの国家の名誉を天秤にかけた上で、もしあなたがその名誉が売られていると判断したならば、(その名誉のほうをより重視して) 日本に対するあなたの考えを表明するよう、そしてそうすることによって、あなたの死をもって日本を生かすようあなたに求めるべきであろう。しかし、このためには、内なる信念が必要である。もし私があなたの立場であったならば、私が言ったことすべてを実行できるかわからないが、あなたが尋ねたので私は自分の見解を述べたまでである。

賀川は、信念はあるが、友人たちに(信念を表明するのを) 控えるように頼まれていると述べた。ガンディーは、「自分の中の内面の声が「こうしなさい。」と言うならば、友人の言うことを聞く必要はない。なぜならば、友人でさえもあなたを欺くことがあるのだから。」とだけ延べた。ガンディーは、「友人たちは生きて仕事を続けたいので、友人たちには選択の余地がない。」と説明した。賀川は協同組合の話題に戻そうとしたが、ガンディーはそうさせなかった。

あなたは素晴らしいことを成し遂げたし、私たちはあなたから学ぶべきことはたくさんある。だが、あなたがたが中国を飲み込もうとしていることをどのように理解したらいいのか、あなたがたはどうやってこれほどの残虐行為を行うことができたのか? そのような状況の中、あなたがたの偉大な詩人(恐らく野口)が、この戦争を人類の戦争であり、中国への祝福であると呼んでいる(ことは理解しがたい)!

続いて、バガヴァッド・ギーターの意味についての長い議論が行われた。ガンディーは、賀川に大変感銘を受け、重要な議論を続けるためにもっと一緒に過ごす時間が取れなかったことを残念に思った(注76)。

## 結論

石田は、日本はガンディーのような偉大な非暴力活動家を輩出できなかったと指摘する。だが、例外として、日本山妙法寺の人たちの活動があると思われる。藤井日達上人によって率いられた僧侶たちは、太鼓を叩き、お題目を唱えながら、しばしば平和集会の先頭に立っていた(注77)。しかし、彼らの存在は印象的であるが、この特定の宗派の規模の小ささゆえに、彼らの影響力は限られていた(注78)。ガンディーの元を訪れた日本の宗教者のほとんどは日本山妙法寺の人たちであったようで、ガンディーと最も長い時間を過ごしたのは間違いなく彼らであった。そうなったのには、強い使命感の下で結び付いた考え方の相似があったと考えられる。藤井上人は、仏教を(日本から見た)西方(即ち、韓国、中国、インド)に返還したいという西天開教への強い望みを抱いていた。なお、日本山妙法寺がガンディーに結び付けて平和活動を行うようになって以来、日蓮宗から派生した創価学会は、平和活動を行うに際してガンディーに言及するようになっている。

第二次世界大戦後、天崎啓昇上人は還俗した。彼は、日本山妙法寺の僧侶時代のことは家族にも話さなかったようである。彼は、資料を何も残さなかった。

日本への強制送還後、丸山行遼上人は、藤井上人に仕えて一年間日本国内を回った。その後、彼は、日本軍の要請により、インドシナのジャングルを通して日本軍がインドへ侵攻する道を整える宣撫工作を行うためインドシナへ派遣された。そして、ボースのインド国民軍の訓練、インド向けのプロパガンダの遂行、シンガポールでのスパイの訓練を行う岩畔機関に配属された。丸山上人は、終戦後の1946年に日本に帰国し、平和活動に身を捧げた。彼は、世界平和及び愛と非暴力の実践を推進するために1958年に藤井上人によって設立された日印サルボダヤ交友会において重要な役割を果たした。日印サルボダヤ交友会は、1960年代を通じて日本とインドの関係を促進する上で大きな役割を果たした。丸山上人は、1967年に交通事故で亡くなった（注79）。

戦後、藤井日達上人は、急進的な平和主義者となり、インドのみならずアメリカやイギリスでも多くの日本山妙法寺を建立し、僧侶も常駐させた（注80）。彼の努力の結果、日本山妙法寺は、1950年代、1960年代の時代には、日本とインドの間の民間レベルの交流の重要な架け橋になった。当時（1960年代から1980年代にかけての時代）は、多くの若い日本人旅行者が、インド旅行中にこれらの日本山妙法寺に滞在した。日本山妙法寺は、安く泊まれて、一風変わった環境ではあったが自由な若者には快適な環境であり、日本の若者にとってユースホステルの役割を果たしていた。日本山妙法寺は、日本の農業・工業技術を学ぶために日本へ行きたいインド人たちにとっての仲介役も果たした。例えば、ガンディー亡き後のガンディー主義運動の指導者ジャヤプラカーシュ・ナーラーヤンによるインド人たちの日本研修旅行への派遣の便宜を図った。つまり、ガンディーのアーシュラムでの冒頭の祈りのマントラ（南無妙法蓮華経）にほのめかされていたように、ガンディーと日本人の間にはあまり知られていないものの豊かな交流があったのである（注81）。

## 注

- 1 今日では、朝の祈りの集会は観光客がいない午前4時半に行われるので、以前より小さなものになっている。アーシュラムの一握りの忠実な住人たちとアーシュラムの時たまの宿泊客が、夕方の祈りの集会と比べると活気さに欠ける中、時には眠気と闘いながら、壁や木の柱にもたれかかって、パーパー・クティーと呼ばれるガンディーが住んでいた小屋のベランダに座る。
- 2 セーワークラーム・アーシュラムのガイドブックでは、そのマントラを“Nammyo ho renge kyo”と書き、「私は法華経の教えに帰依する（“I bow to the enlightened souls.”）」と翻訳している。例えば、S.P.Pande, *Ashram Prayers*, Sevagram: Sevagram Ashram Pratishtan, 1999, pp.5, 19.を参照のこと。  
ガンディーは、そのマントラの意味を“Salutation to the enlightened ones”とした。“Speech at Prayer Meeting” in Srirampur, 30 November 1946, *Harijan*, 5 January 1947.を参照のこと。  
マントラの意味については注42も参照のこと。
- 3 Dharma Vir, *Gandhi Bibliography*, Delhi: Gandhi Smarak Nidhi, 1967, pp.487-494.
- 4 第二次世界大戦の以前は、日本人が書いたものの中にもガンディーについて述べているものは相対的にほとんどなかったことにも注目するべきである。1933年にガンディーと短い期間ではあるが会見を果たした日本

- 人の僧侶藤井日達上人は、彼の伝記の中で、日本はインドの独立運動には無関心であり、実際のところイギリス側に立っていたと述べている。Nichidatsu Fujii, *My Non Violence: An Autobiography of a Japanese Buddhist* (trans. T.Yamaori), Tokyo: Japan Buddha Sangha Press, 1975, pp.67-68.を参照のこと。
- 5 “A War of Giants: Japan and Russia”, *Indian Opinion*, 11 March 1905.
  - 6 “Russia and Japan”, *Indian Opinion*, 10 June 1905.
  - 7 “Mass Meeting of Transvaal Indians”, *Indian Opinion*, 6 April 1907.
  - 8 ガンディー自身の著『ヒンド・スワラージ』の中の「読者 (= Reader)」と「編集者 (= Editor)」のやり取りで次のようなものがある。「読者」が「日本のようにインドもならなければならない。私たちは自分たち自身の海軍、陸軍を持ち、繁栄しなければならない。そうすれば、インドの声は世界中に鳴り響くでしょう。」と提案すると、「編集者」は「あなたはイギリス人なしのイギリス統治を欲している。あなたは虎の性質は欲しいが虎は欲しくない。…これは私が望むスワラージではない。」と返答した。M.K.Gandhi, *Hind Swaraj or Indian Home Rule*, Ahmedabad: Navajivan, 1938, pp.29-30.を参照のこと。
  - 9 “Will Indians be Slaves?”, *Indian Opinion*, 11 May 1907.
  - 10 Otane Takata to Gandhi, 30 April 1924, and Gandhi’s reply to Otane Takata [sic], after 30 April 1924.を参照のこと。
- 高田は、彼の本が出版されると「すぐにあなた (= ガンディー) に関する他の4冊の本が続いた。」と述べた。S.N. (Sabarmati Nidhi, *Gandhi Papers*, held at the Sabarmati Ashram Preservation Trust, Ahmedabad) 8759.
- 高田の質問へのマハーデーヴ・デサーイーの返事が出ているS.N. 8837.も参照のこと。
- 1928年10月29日に高田は再びガンディーに手紙を書いた。この時の内容は、ガンディーの著作に関して収集したものを受け取ってほしいというものであった。S.N.15057.
- 高田雄種著『聖雄ガンデー』（原著タイトルのママ）は1922年に日本で出版された。高田の本と同じ年に出版された他の4冊の本は、ジャーナリスト、編集者及び後に沖縄の権利獲得のための活動家となった饒平名智太郎著『ガンヂ審判の日』（原著タイトルのママ）、饒平名智太郎と学者、哲学者及び右翼の活動家の鹿子木員信との共著『ガンヂと真理の把持』（原著タイトルのママ）、ジャーナリスト及び評論家の茂森唯士著『ガンヂ及びガンヂイズム』（原著タイトルのママ）、哲学者の帆足理一郎著『トルストイとガンディーの宗教思想』（原著タイトルのママ）であった。
- 11 “Notes: Advice from Japan”, *Young India*, 13 August 1925.
  - 12 Gandhi to Narandas Gandhi, 22/23 June 1930.
- 日本人のキリスト教作家金井為一郎は、1929年8月28日付の手紙でガンディーの自伝を日本語に翻訳する許可を求めた。S.N. 15620.
- 13 Gandhi to Narandas Gandhi, 12 February 1932.を参照のこと。
  - 14 例えば、ガンディーがこのことに関する自身の立場を表明している“Japanese or British?”, *Young India*, 18 June 1931.及び“Discussion on Foreign Cloth Boycott”, *The Hindu*, 26 June 1931.を参照のこと。
  - 15 “Answer to Questions”, *Harijan*, 27 February 1937.
  - 16 ガンディーは、中国の日本との闘争において明らかに中国を支持した。しかし、ガンディーは、中国に対し、防衛手段として非暴力を推奨した。“Interview to Timothy Tingfang Lew”, *Harijan*, 28 January 1939.を参照のこと。そのことをより詳細に知りたい時は、Pyarelal, “A World in Agony”, *Harijan*, 28 January 1939, pp.440-443.を参照のこと。
  - 17 例えば、“Non-violent Resistance”, *Harijan*, 12 April 1942; and “Draft Resolution for AICC”, before 24 April 1942, available in the standard edition of the *Collected Works of Mahatma Gandhi* (以後、CWMG), LXXVI:



- 63-65.を参照のこと。ネルーが日本の侵略の際にはインド人による焦土作戦とゲリラ作戦を提案したのに対し、ガンディーは非暴力的な抵抗を好んでおりそのような作戦は選択肢になかった。“Question Box: Guerrilla War”, *Harijan*, 26 April 1942.を参照のこと。
- 18 “Question Box: Are You Not Inviting Japanese?”, *Harijan*, 17 May 1942 及び翌月に亘っての多くのそのような執筆物を参照のこと。
- 19 K.A.Abbas, *Let India Fight for Freedom!* Bombay: Sound, 1943, pp.11, 28.を参照のこと。もちろんイギリス人支配者に対して日本と協力して戦うことを好んだインド人もいた。元インド国民会議派議長のスバース・チャンドラ・ボース（1897-1945）は、日本が征服した地域に住んでいるインド人で構成された日本が支援するインド国民軍を組織して率いた。1944年3月18日、インド国民軍は、インドの北東辺境のコヒマで、イギリス軍との血みどろの戦いに敗れた。伝えられるところによれば、ボースは、日本の降伏直後の飛行機事故の結果死亡したとされている。Leonard A.Gordon, *Brothers against the Raj: A Biography of Indian Nationalists Sarat and Subhas Chandra Bose*, New York: Colombia University Press, 1990.を参照のこと。
- 20 “Friendly Advice”, *Harijan*, 31 May 1942.
- 21 “Oh! The Troops”, *Harijan*, 5 July 1942.
- 22 ガンディーが7月に天崎啓昇（ケーシャヴ）上人に手紙のコピーを渡したことを指し示す新聞記事がある。“An Open Letter to Japan from Gandhi”, *Yomiuri*, 18 September 1942.を参照のこと。しかし、ケーシャヴは、1942年初頭に逮捕されたとされているため、年代的に整合性が成り立つのかという問題がある。1942年初頭は、ガンディーが手紙を書く前の時期である。要するに、この手紙がどのようにして日本に送られたのかは、いまだ不明である。
- 23 “To Every Japanese”, *Harijan*, 26 July 1942.
- 24 Translation (“Mahatma Gandhi: The Japanese Connection”に掲載したこの記事の英訳という意味) by Akira Hayashi.
- 25 “Atom Bomb and Ahimsa”, *Harijan*, 7 July 1946.
- 26 “Japan’s Changing Image of Gandhi”, in Takeshi Ishida, *Japanese Political Culture: Change and Continuity*, New Brunswick: Transaction Books, 1983, pp.137-146, at p.137.を参照のこと。
- 27 Ishida, *Japanese Political Culture*, p.137.  
ガンディーは元々は、非暴力による抵抗の「技術」を「受動的抵抗」と呼んでいたことに注意すべきである。その後、ガンディーは「受動的抵抗」という用語の意味するところに気付き、ソローの用語「市民的不服従」あるいはガンディー自身の造語「サティヤグラハ」または「真理の力」を使用するようになった。
- 28 Ishida, *Japanese Political Culture*, p.139.
- 29 Ishida, *Japanese Political Culture*, p.138.
- 30 Ishida, *Japanese Political Culture*, pp.139-140.
- 31 Ishida, *Japanese Political Culture*, p.139.
- 32 Ishida, *Japanese Political Culture*, p.139.
- 33 Ishida, *Japanese Political Culture*, p.142.
- 34 Shanti Tseng, *By the Side of Bapu*, Rajghat, Varanasi: Sarva Seva Sangh, 1982, pp.48-49.
- 35 Duncan Greenlees, *Gandhi Ashram*, Palghat: Scholar Press, 1934, p.39.
- 36 Nilla Cram Cook, *My Road to India*, New York: Lee Furman, 1939, pp.369-370.  
クックは、アーシュラムに來た「日本人の僧侶」について、「日本語で仏教經典を唱えながら、日の出から日没まで一日中うちわ太鼓を叩いていた」と説明し、「個人的には、このような熱狂的な活動の真っ只中において一所（ひとところ）に座って太鼓を叩くことができる人を称賛した」としていたが、同じバンガ

ローに住んでいたダンカン・グリーンリー [ダンカン・グリーンリーズという女性のこと] はその感情を共有しなかった。

- 37 "Talk with a Japanese Monk", *Haribanbandhu*, 12 September 1933.
- 38 "Advice to Japanese Buddhist Priests", *The Hindu*, 12 October 1933.
- 39 Fujii, *My Non Violence*, p.79.
- 40 Robert Kisala, *Prophets of Peace: Pacifism and Cultural Identity in Japan's New Religions*, Honolulu: University of Hawaii Press, pp.49-50. を参照のこと。
- 41 Fujii, *My Non Violence*, p.80.
- 42 日蓮大聖人 (1222-1282) は、仏教を日本文化に適応させることに貢献した戦闘的な日本の仏教徒である。創立者の名前にちなんで名付けられたこの仏教の宗派は、日本仏教の最大の宗派の一つである。その教えは法華経に基づいている。主な祈祷の言葉は「南無妙法蓮華経」(「完全なる真理の蓮華への崇敬」「善法である法華経への崇敬」など様々に訳される) である。
- 43 ガンディーの影響が強かったことと同時に、原爆が投下されたことにより、藤井上人は最終的には平和主義へと傾倒した。Jacqueline I.Stone, "Nichiren's Activist Heirs: Soka Gakkai, Rissho Koseikai, Nipponzan Myohoji", in Christopher Queen, Charles Prebish and Damien Keown (eds.), *Action Dharma: New Studies in Engaged Buddhism*, London: RoutledgeCurzon, 2003, pp.63-94, at p.79. を参照のこと。
- 44 Gandhi to Vallabhbhai Patel, 27 October 1933. を参照のこと。Gandhi to Ramniklal Modi Chanda, 14 November 1933. も参照のこと。
- 45 Masahiko Togawa, "Living with Gandhi", *The Memoirs of the Institute for Advanced Studies on Asia*, Institute for Advanced Studies on Asia, 2011, no.159, pp.322-360 at p.336 (in Japanese).
- 46 Masahiko Togawa, "A Chance Encounter with Gandhi", *Sarvodaya*, Japan-Bharat Sarvodaya Mitrata Sangha, 2012, vol.52, nos.2/3, pp.10-18 at p.12-13 (*Sarvodaya* は日本語誌)。丸山上人は自身の人生についてのスピーチの中で、「私のグルジー (藤井グルジー。グルジー=師匠) の意志に従って」1935 年 11 月に初めてガンディーのアーシュラムを訪れたと述べている。

Gyoryo Maruyama, "Staking the Turbulent Times on the Mission in the Indian Sub-Continent", *Sarvodaya*, Japan-Bharat Sarvodaya Mitrata Sangha, 1979, vol.19, nos.3/4, pp. 4-13 at p.10. を参照のこと (*Sarvodaya* は日本語誌)。丸山上人はインド中を頻繁に旅行し、セーワプログラムに住み始めたのは 1937 年 12 月 8 日であった。英国当局は、この時期にインドで活動していた日本山妙法寺の僧侶に関する記録を保管していたが、その中で丸山上人のことは大きく取り上げられていた。Ranjana Mukhopadhyaya, "Fujii Nichidatsu: Seiten [Indo] Kaikyo no Taiken" ("Fujii Nichidatsu: The Experience of Proselytizing in Western Paradise [India]"), in Masamichi Ogawara (ed.), *Kindai Nihon no Bukkyo: Ajia Taiken to Shiso no Henyo (Buddhists in Modern Japan: Their Experiences of Asia and Ideological Transformation)*, Tokyo: Keio University Press, 2010, pp.391-398 (in Japanese). を参照のこと。
- 47 1939 年丸山上人はネルーに、日本の対中国戦争を正当化し、イギリス帝国主義を非難する書簡を送った。
- 48 Ranjana Mukhopadhyaya, "Fujii Nichidatsu"; and Gyojun Imai, *The Drums which Reverberate through Arakan Mountain Range*, Tokyo: Japan-Bharat Sarvodaya Mitrata Sangha, 1986, pp.219-221 (in Japanese). を参照のこと。
- 49 Brijkrishna Chandiwalla, *At the Feet of Babu*, Ahmedabad: Navajivan, 1954, p.35.
- 50 Chandiwalla, *At the Feet of Babu*, p.35.
- 51 Balvantsinha, *Under the Shelter of Babu*, Ahmedabad: Navajivan, 1962, p.41.
- 52 From 25 April to 15 July. See Togawa, "A Chance Encounter with Gandhi", p.14.

- 53 “Advice to Keisho”, *Harijan*, 13 July 1935.
- 54 “Speech at Ashram, Wardha”, *Harijan*, 20 July 1935.
- 55 Ramnarayan Chaudhary, *Bapu As I Saw Him*, Ahmedabad: Navajivan, 1959, p.205.
- 56 Togawa, “A Chance Encounter with Gandhi”, p.13.を参照のこと。
- 57 ここでの日付は不明であるが、彼は日本軍の真珠湾爆撃直後に拘禁され、1942年初頭にデリーに移されたようである。デリーでの抑留期間も不明であるが、雑誌『同盟グラフ』は天崎が1943年にデリーの捕虜収容所にいたことを確認している。Takashi Kaite, “An Account of War Internment in India”, *Doumei Graph*, 1943, vol.11, no.1, pp.65-69 at p.66.を参照のこと。他、彼と一緒に八木呉正、渡辺平吾、三木慈教の三人の日本山妙法寺の僧侶も抑留された。Togawa, “Living with Gandhi”, p.325.を参照のこと。
- 58 Togawa, “A Chance Encounter with Gandhi”, p.13.
- 59 “The Ashram Prayer”, *Harijan*, 15 February 1942.
- 60 N.ギアは、現代の日蓮宗信徒は、デサーイーが文書に記録した「オーム南無妙法蓮華經」というマントラの代わりに「南無妙法蓮華經」というマントラを使用していると指摘している。“Gandhi and Mahayana Buddhism”, *Journal of Oriental Studies*, 1996, vol.35, no.2, pp.84-105, at note 29.を参照のこと。
- 61 Mahadev Desai, “At Sevagram”, in D.G.Tendulkar et al (eds.) *Gandhi: His Life and Work*, Bombay: Keshav Bhikaji Dhawale, 1944, pp.197-207 at pp.204-205.を参照のこと。
- 62 ガンディーが1933年12月13日にデリーで日本の代表団と会見した記録はあるが、その頃マガンワディで日本人の訪問者と会見した唯一の記録は、1935年12月下旬か1936年1月上旬に野口米次郎と、そして1936年1月7日に日本女子大学の高良富子博士と会見した記録である。高良博士の訪問の記録に関しては、Mahadev Desai, “Weekly Letter: Dr. Kora”, *Harijan*, 18 January 1936, p.386.を参照のこと。
- 63 “Speech at Prayer Meeting, Sodepur”, *Amrita Bazar Patrika*, 9 December 1945.
- 64 CWMG『ガンディー全集』では、この僧侶はG.ハイシャオ上人となっている。だが、この名前の僧侶に関する記録はないようである。ハイシャオはおそらくケイショウ（啓昇）である。
- 65 “Speech at Prayer Meeting, Srirampur”, *Harijan*, 5 January 1947.
- 66 CWMG『ガンディー全集』では、再びG.ハイシャオ 上人として言及されている。
- 67 “Speech at Prayer Meeting, New Delhi”, 3 May 1947, CWMG LXXXVII: 403-406.  
祈りの順番がいつから日蓮宗のお題目に戻ったのかを正確に特定することはできないが、戻ったのはそれからほんの少し経ってからである。以下を参照のこと。
- 68 CWMG『ガンディー全集』によると、再びG.ハイシャオ上人と名付けられている。
- 69 “Notes: The Reason for Addition”, *Harijan*, 17 August 1947.
- 70 Yone Noguchi, “A Visit from the Far East” in S.Radhakrishnan (ed.), *Mahatma Gandhi: Essays and Reflections on His Life and Work*, Bombay: Jaico, 1956, pp.159-162 at p.159.を参照のこと。  
野口米次郎（1875-1947）は、日本語と英語で文章を書いた有名な詩人であった。彼は若い頃アメリカに住んでいたが、1935年にアジアの研究を始め、この時にインドを訪れた。彼のガンディー訪問から10年後の太平洋戦争の最激烈期に至るまで、サティヤグラハはイギリスに立ち向かうことを可能にさせる主張的要素を持ったものである点に注目しながら、サティヤグラハを静寂主義的な抵抗形態として理解するのは誤りであると書いていた数少ない人物の一人であった。しかしながら、1942年までに野口はガンディーに対する評価を改め、ガンディーの活動を「無抵抗」「漸進主義」と呼び、彼の活動はインドの独立を達成するには十分ではないと述べるようになった。Ishida, *Japanese Political Culture*, pp.141, 143.を参照のこと。
- 71 1892年、日本に焦点を当てたアーノルドの週刊連載旅行記が、『海と陸』と『ジャポニカ』という2冊の本として出版された。ガンディーはロンドンでの学生時代にアーノルドの友人となり、連載記を「とても熱心

に」読んだ。ガンディーはインタビューの中で、アーノルドは日本について「親密な共感を持って」書いたと述べた。

- 72 “Interview to Yone Noguchi”, *Harijan*, 11 January 1936. インタビューのもう少し詳細な内容については、Mahadev Desai, “Weekly Letter: Japan’s Poet Visits Gandhiji”, *Harijan*, 11 January 1936, p.381.を参照のこと。
- 73 Amartya Sen, “Tagore and his India”, *The New York Review*, 28 August 2001.を参照のこと。
- 74 “Discussion with D.Takaoka”, *Harijan*, 24 December 1938. 高岡氏の訪問に関するより詳細な内容については、Mahadev Desai, “A Japanese Visitor”, *Harijan*, 24 December 1938, p.404.を参照のこと。
- 75 賀川豊彦 (1888-1960) は、日本とアメリカのキリスト教系の大学で教育を受けた。日本に帰国すると彼は貧しい人々と共に働き、労働運動の指導者となった。彼は平和主義者で、日本の中国への攻撃に関し中国に謝罪したかどで 1940 年に逮捕された。その後、彼は差し迫った戦争を回避するためにアメリカへ渡った。戦後は、日本で女性の投票権を獲得するための取り組みを主導した。賀川の平和主義のより詳細なニュアンスを含んだ見解については、Yuzo Ota, “Kagawa Toyohiko: A Pacifist?”, in Nobuya Bamba and John F.Howes (eds.), *Pacifism in Japan: The Christian and Socialist Tradition*, Vancouver: University of British Columbia Press, 1978, pp.169-197.を参照のこと。
- 76 “Discussion with Toyohiko Kagawa”, *Harijan*, 21 January 1939. 賀川氏の訪問に関するより詳細な内容については、Mahadev Desai, “Dr. Kagawa’s Visit”, *Harijan* 21 January 1939, pp.434-436, continued on pp.430-432.を参照のこと。
- 77 Ishida, *Japanese Political Culture*, p.145.
- 78 Ishida, *Japanese Political Culture*, pp.156-157.
- 79 Nichidatsu Fujii, “To the Memory of the Late Rev. Gyoryoinnichiyo as a Man of Virtue”, *Sarvodaya*, Japan-Bharat Sarodaya Mitrata Sangha, 1986, vol.19, nos.3-4, p.3.を参照のこと (*Sarvodaya* は日本語誌)。
- 80 N.C.Parashar, “World Peace Pagoda-Rajgir (Bihar)”, *Modern Review*, 1970, vol.124-6, no.1, pp. 42-44.を参照のこと。
- 81 ここでは、ガンディーと日本の物語をガンディー側から語ろうとして来た。日本における資料を使った研究が進めば、ガンディーの元を訪れた藤井上人以外の僧侶の中で、日本社会に非暴力に関連した何らかの影響を及ぼした僧侶はいたのか、日本で軍国主義が高まる中、日本へ帰国したガンディーの信奉者たちはどうなったのか、日蓮宗は、日本でガンディーの名前をどのように利用し、それはどのような効果をもたらしたのか、なぜガンディーのアーシュラムに長く滞在した僧侶たちは皆このグループ (日本山妙法寺) から来ていたのか、といった疑問を検討することができ、今度は日本側からガンディーと日本の関係をより明らかにすることができよう。

(筆者注：上記注 81 の文章は、本論文ではガンディーと日本の物語をガンディー側からの資料をメインにして語って来たため、「ガンディー側から」となっているが、実際には「日本側から」のガンディーと日本の物語の研究は幾つか存在する。「日本側から」のガンディーと日本の物語の語りの特徴は、日本人はガンディーをどのように捉えていたのかという視点が中心になっており、日本山妙法寺に関してはその創始者藤井日達上人 (及び彼の愛弟子の丸山上人) をメインに取り上げる形になっているところにある。本論文は、海外の視点を取り入れ、「ガンディー側から」の英語資料をメインに、ガンディーは日本という国をどう見ていたのか、ガンディーが日本山妙法寺の僧侶の誰に最も親しみを感じていたのか、ガンディーはどのような思いから朝夕の祈りの集会に「南無妙法蓮華経」の文言を入れたいと思ったのかといったガンディーの視点を重視した研究であるところが特徴である。)

なお、本論文の「導入」及び「ガンディーと日本」の部分は、『サルボダヤ』第 59 巻 5 号、pp.6-15、2019 年 5 月及び『サルボダヤ』第 59 巻 9 号、pp.8-14、2019 年 9 月で既に発表した。本論文では、その部分に

も一部修正を加え、かつ論文の中の多くの部分を占める「日本とガンディー」以降の部分を加筆して作成したものである。